

しょうしんげ 「正信偈」のおはなし④

今年もお盆を迎えることができました。

お盆というのは『仏説盂蘭盆経』というお経に書かれた、お釈迦様の十大弟子の一人で「神通第一」といわれた目連尊者のお話のもとになっているといわれます。

目連尊者のお母さまが餓鬼道に墮ちて、逆さ吊りの罰を受けて苦しんでおられるのを神通力で見えた目連尊者は、お釈迦様に助けを求めます。

神通力というのは、目には見えないところを見通せる、超能力のようなものです。

目連尊者の母親は、目連尊者を育てる時に物惜しみしたことによる罪によって、成仏することができずに逆さ吊りの罰を受けていたのです。

インドでは安居（夏安居、雨安居）といって、雨季の夏に草木が繁り虫や蛇などの動物が活動するのでお坊さんたちはその間、外での修行をやめ、定住して修行するのですが、お釈迦様は、7月15日にお坊さんたちの修行が終わるので、その日にお坊さんたちを供養して、お母さんの供養もお願いしなさいと目連尊者を諭されます。

その供養の功德によって、目連尊者は母親を餓鬼道から救うことができました。

「逆さ吊り」のことを、インドの言葉では「ウランバーナ」というそうです。

それを中国で漢字に当てて、「盂蘭盆」と呼ばれるようになりました。

お釈迦様のおかげで餓鬼道に墮ちた母親を苦しみから救うことができたというこの話が元になって、中国でお盆の供養が始まったといわれています。

お盆は正式には「盂蘭盆会」といいますが、お他宗ではお盆は祖先の霊魂があので世から帰ってくる季節であるといわれています。しかし浄土真宗では、そのようなことはいいません。

お他宗と違って、毎日がお盆のようなものであるのが、真宗だといえるでしょう。

浄土真宗では古来、往相廻向・還相廻向という教えがあり、往相廻向とは阿弥陀如来に導かれて亡き人が極楽浄土へ往生して仏様となること、還相廻向とは仏様が浄土からこの娑婆世界へ還って

きて衆生救済しゅじょうきゅうさいをされることをいいます。

ですから亡き仏さまは還相廻向のおはたらきにより、お盆の季節に関係なく、いつでも還ってきてくださっているのです。

この世に還っていらしても、私たち人間の眼からは、仏様のお姿を見ることはできません。

眼には見えないけれども不思議なおはたらきとして、皆様お一人お一人のことをいつも暖かく見守って、幸せになってほしいと応援していてくださるのが、仏さまのお仕事です。

大切なことは、私たちを見守って生かしてくれている亡き人々への感謝かんしゃと報恩ほうおんの心だと思ひます。

さて今日で、「正信偈」の依経段えきょうだんのお話も最後になります。

「正信偈」冒頭の二句は帰敬ききょうの頌じゆまたは総讚そうざんといわれ、阿弥陀如来への親鸞聖人しんらんしょうにんの信仰告白のお言葉です。

その後は、大まかに二つに分けられます。

前半の「依経段」は「法蔵菩薩因位時ほうぞうぼさいんにじ」から「難中之難無過斯なんちゅうしなんむかし」までで、これはお釈迦様が説かれた『大無量寿経だいむりょうじゆきやう』の教えによって、すべての人を救うと誓われた阿弥陀如来の、ご本願のいわれや教えが書かれています。

後半の「依釈段」は「印度西天之論家いんどさいてんしろんげ」から最後の「唯可信斯高僧説ゆいかしんしこうそうせ」までで、インド・中国・日本の三国で活躍された七人の高僧がたが『大無量寿経』の教えを受け止め、解釈を発展されて、親鸞聖人にまで受け継がれて届けられた、その高僧がたのお徳が讃えられています。

親鸞聖人は、『大無量寿経』を説かれたお釈迦様と、救い主である阿弥陀仏の恩徳が深いことを喜ばれ、それを人々にも伝えるために、「正信偈」をお作りになられたわけです。

お念仏という他力の「行」によって救われるところから、『教行信証』行巻の最後に、親鸞聖人は感謝の気持ちを込めて「正信偈」を加えられたのだと思ひます。

ぎやくしんけんきやうだいきやうき そくおうちやうぜつ ごあくしゆ
「獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」

しん み うやま きやうき ごあくしゆ ちやうぜつ
〈信をえて、見て敬い、おおきに慶喜すれば、すなわち、よこざまに五惡趣を超截す。〉

この二句は、阿弥陀仏の本願を信じることによって得られる五つの利益りやくの四番目、「横超五趣おうちやうごしゆの益やく」について書かれています。

信心を得て大いに喜び敬う人は、仏さまの力によって、迷いの世界を離れることができるという利益です。

「横」は「よこざま」という意味で、すべての人を救うという阿弥陀仏のお誓いを信じることによって、迷いの世界（五悪趣）をただちに断ち切って、速やかにその世界を離れることをいいます。これは「他力」のことでもあります。

「超」は「こえて」ということであり、他力によって迷いの世界を楽々と超えて、涅槃のさとりを開くことです。

「截」は、断ち切ること、という意味です。

「五悪趣」というのは、衆生が自分のなした悪い行ないによって赴く、以下に述べる五つの迷いの世界のことです。

- ① 地獄…地下にある牢獄で、自らの罪業の結果趣く苦しみの極まった世界
- ② 餓鬼…貪欲の報いとして趣く、常に飢餓に悩まされる世界
- ③ 畜生…愚癡の報いとして趣く、鳥、獣、虫、魚など、あらゆる動物の世界で、本能の趣くまに生きる
- ④ 人間…欲望に執着することによって苦悩する娑婆世界で、四苦八苦に悩まされる
- ⑤ 天…天人や天の神々が住み、楽しみや喜びは多いが、まだ欲望にとらわれる迷いの世界

「六道輪廻」という言葉がありますが、その場合にはこの「五悪趣」の③と④の間に「阿修羅」（絶えず鬪争に明け暮れ、戦いを繰り返す世界）が入って、「六道」となります。

奈良の興福寺にある「阿修羅像」が有名ですが、阿修羅は元々、鬪争的な戦いの神様です。帝釈天と戦争をする戦いの場のことを「修羅場」といいます。八部衆や二十八部衆の阿修羅は古代インドでは仏教の守護神とされました。

生命は、この六つの世界を車輪が回るようにグルグルと移り変わり生まれ変わるといわれます。

このような輪廻流転する世界の束縛から解放されて、迷いの苦悩から脱することを、解脱とか涅槃といえます。さとの境地のことです。

そして六道輪廻から抜け出すには、三毒の煩惱（貪欲＝欲、瞋恚＝怒り、愚癡＝愚かさ）を捨てなければならぬのです。

現代語訳は、以下の通りになります。

《信心を得て、大いに仏様を敬い、救われることを喜ぶなら、本願力によってただちに五悪趣といわれる迷いの世界を離れ、浄土に生まれることができるのです。》

「一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願」

〈一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、〉

これから後の四句は、阿弥陀仏の本願を信じることによって得られる五つの利益の五番目、「諸仏称讃の益」です。

善人であろうと悪人であろうと一切の人々は、阿弥陀仏の弘い誓願（本願）を信じるならば、仏さまたちにほめたたえられる人となるという利益について述べられています。

『大無量寿経』下巻の四十八願のうち第十八願の成就文には、以下のように書かれています。

「諸有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念」

〈諸有の衆生、其の名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。〉

《あらゆるすべての人々は、阿弥陀仏の名号のいわれを聞いて、信じ喜ぶ心を、一念でも起こすとします。》

これは阿弥陀仏の本願すなわち、第十八願の成就（成し遂げられること）を説く文です。

「南無阿弥陀仏」という名号を聞いて阿弥陀仏を信じるのが、往生の正因すなわち原因・大元であることを示しています。

「聞信如来弘誓願」という言葉は、この『大無量寿経』下巻の文章からきたものです。

また浄土真宗では「聞即信」（聞くことはすなわち信じることである）とよくいわれますが、「聞く」ということは、とても重要なことであるとされてきました。

これは本願をそのままに、疑いなく聞くことが、すなわち信心であるということです。

教えを聞く人の心は、空っぽでなければ、教えは受け取れません。

自分の見解、自力のはからいが充満している人の心の中には、それ以外の教えは入ってきません。

そして何を聞くのかといえ、親鸞聖人は『教行信証』信巻で、次のように書かれています。

〈「聞」というは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを「聞」というなり
(『教行信証』信巻)

《「聞」というのは、私たち衆生が、阿弥陀仏が衆生救済の願(仏願)を起こされた理由(ことの起り=生起=なぜ阿弥陀如来が本願を起こされたか)と、その願(本=はじめ)が成就して、現に私たちが救いつつあるという結果(末=結末=その結果どのようにして私を救おうとされているか)を聞いて、疑いの心がないのを「聞」というのです。〉

「仏願の生起本末」というのは、阿弥陀仏が衆生を救済したいという願(仏願)を起こされた理由(生起)と、その願(本)を成しとげて、私たちが救いつつあること(末)です。

阿弥陀仏は、苦しみ悩んでいる衆生や煩惱から離れられない罪惡深重の凡夫のため、人々を救済するぞという本願をたてられました。(生起)

長い思惟と修行の結果、その本願が達成されて、阿弥陀仏は「必ず救うぞ」とはたらき続けてくださるというのです。(本末)

この「仏願の生起本末」を聞いて疑いのない心を、「聞」といいます。

現代語訳は、以下の通りです。

《善人も悪人も、どのような凡夫であっても、阿弥陀如来の本願(弘誓願)のいわれを聞いて信じれば、》

「仏言広大勝解者 是人名分陀利華」

〈仏は「広大勝解の者」とのたまひ、この人を「分陀利華」となづく。〉

この「広大勝解者」という言葉は、菩提流志(インド出身の訳経僧)が訳した『無量寿如来会』

(大無量寿経の異訳)に出てくる言葉で、「広大勝解のひと」というのは「阿弥陀仏の広大な教えをよく理解した智慧の人」という意味になります。信心のひとをほめた言葉です。

「分陀利華」はサンスクリット語の「プンダリーカ」という言葉から来ており、白い蓮の花、すなわち白蓮華のことです。

インドでは古来、白蓮華は蓮の花の中でも最も尊いものとされ、仏法を象徴するものといわれました。

そして蓮は汚い泥の中から生えてくるのに美しい花を咲かせ、しかもその花は泥に染まらないところから、煩惱を解脱して涅槃すなわちさとりを得ることにたとえられます。

『観無量寿経』には、次のような言葉が書かれています。

「若念仏者 当知此人 是人中分陀利華」

〈もし念仏する者は、まさに知るべし、この人はこれ人の中の分陀利華なり〉

《もし念仏する者があつたら、この人は人間の中の白蓮華です》

これは娑婆世界という煩惱に満ちた泥のような世界にあつても、お念仏を称える人は、白い蓮の花のように尊い存在であるということを行っています。

現代語訳は、次のようになります。

《お釈迦様は、この人を勝れた智慧を得た者であると呼び、汚れのない白い蓮の花(分陀利華)のような人と名づけるのです。》

「弥陀仏本願念仏 邪見憍慢悪衆生」

〈弥陀仏の本願念仏は、邪見・憍慢の悪衆生〉

ここからの四句は、「結誠」と呼ばれる、「依経段」の最後を締めくくる結びの言葉となります。

「邪見」というのは、誤った自分の考えに執らわれ、仏教の教えに背いた邪悪な考えをする人のことです。

「憍慢」というのは、おごり高ぶる心のことです。自分に執着して自己満足する心で、世界で一番自分が偉いと思いがっている人です。そして自分が間違った考えをしていることにも気づかないのです。

しかしこれは紛れもなく、仏さまの眼から見た私たち自身のことを言っているのです。

こうした人たちのことを「邪見 憍慢 惡衆生」といいます。

現代語訳は、以下の通りです。

《阿弥陀仏の本願による念仏のおしえは、誤ったよこしまな考え(邪見)を持ち、おごり高ぶる(憍慢)人々が、》

「信楽受持甚以難 難中之難無過斯」

〈信楽受持することはなほだ以てかたし。難中の難、これに過ぎたるはなし。〉

『大無量寿経』には「難中之難 無過此難」、『阿弥陀経』には「難信之法」と書かれており、信心は簡単に得られるものではない、「難中の難」であるということです。

他力の信心は信じるのが簡単だと思っていたのに、たやすいようで難しい、というわけです。

阿弥陀仏の救い・他力の信心は、なぜ信じるのが難しいのでしょうか。

邪見・憍慢の人たちは、無意識に間違った考え(邪見)をして、自分は正しいとおごり高ぶっている(憍慢)ために、阿弥陀仏の本願を素直に聞くことができません。

しかし本願を信じて他力の信を得るには、自分のはからいや執着心、自分中心の考えを捨て、疑いの心を捨てなくてはなりません。

ですから念仏往生の教えが難信であるのは、教えが難しいからというわけではなく、衆生の心が邪見と憍慢心に満ち、疑い深いからだといわれます。

信心は、仏さまの他力回向のおはたらきによって、初めて得られるということがわからないのです。

自分の考えに執着し、とらわれているままの心では、到底信じられないのです。

阿弥陀如来が私たちを救ってくださるというお誓いを信じることは、私たちが自分の努力でできることではありません。

信心は、ただ安心して、自分のはからいを超えた大いなる存在に「おまかせ」したところから、自然に開けてくる世界です。

それだからこそ、阿弥陀如来の大悲は、迷える人々のためにそそがれているのです。

現代語訳は、以下の通りです。

《^{しん}信じること、^{う たも}受け保つことは^{じつ むすか}実に難しいのです。^{なん なか なん}難の中の難であり、これほど^{むすか}難しいことは^{ほか}他にありません。》

「正信偈」が書かれている『^{きょうぎょうしんしょう}教行信証』には、阿弥陀如来のお救いに触れた親鸞聖人の感動と喜びが書かれており、「正信偈」は、その『教行信証』の内容を凝縮したエッセンスともいえるものです。

自分のはからいを捨てて、阿弥陀如来の本願他力におまかせすることによって実際に救われた、親鸞聖人の大きな喜びが説かれています。

無知で愚かで情けない生き方しかできない私たちであっても、『大無量寿経』に説かれた阿弥陀如来のお誓いを信じ、阿弥陀如来やお釈迦様、高僧がたのご恩に感謝するお念仏を称えることによって救われるのです。

拙い私のお話で、親鸞聖人の喜びと感動がどれだけお伝えできたか甚だ心許ないですが、以上をもちまして、2014年3月の春彼岸から3年余り続けてきました「正信偈」のお話を終わらせていただきます。

長い間お付き合いくださり、ありがとうございました。